## 明治期における瀧廉太郎関連新聞・雑誌記事総目録

#### 松 本 正\*

【要 旨】 本稿では、瀧廉太郎研究に資するため、瀧廉太郎に関する新聞・雑誌記事を、総目録として報告した。瀧廉太郎が音楽活動を行った明治 30 年代の新聞・雑誌記事からは、彼の演奏活動と留学関係の多くの情報を得ることができる。特に具体的な演奏活動については、新聞・雑誌記事以外からはほとんど知りえない。また、留学関係については、彼に対する留学生としての期待等、公文書や書簡からは読み取ることができない情報を得ることができる。

【キーワード】 瀧廉太郎 明治期の演奏会 明治期の音楽留学生

## I はじめに

本稿の目的は、これまでに調査することのできた瀧廉太郎に関する新聞・雑誌記事を、総目録として報告することである。

瀧廉太郎が活動した明治 30 年代の新聞・雑誌記事からは、瀧廉太郎の演奏活動と留学関係の多くの情報を得ることができる。特に演奏活動の具体については、新聞・雑誌記事以外からはほとんど知りえない。瀧廉太郎がステージに立って初めてピアノの独奏を行ったのは、明治29年12月、音楽学校学友会演奏会においてである。これ以後、独奏、連弾、伴奏等でたびたびステージに立つようになる。それに伴って、新聞や雑誌にも取り上げられ、批評の対象となる。演奏家、瀧廉太郎が取り上げられた期間は、彼が頭角を現し始めた、およそ明治31年の音楽学校専修部3年生から明治34年のドイツ留学までの4年間である。

この間,新聞では『読売新聞』,『毎日新聞』,『国民新聞』等が,雑誌では『帝国文学』,『女学雑誌』,『天地人』等が,音楽評の中で瀧廉太郎の演奏に言及した。こうした新聞や雑誌の音楽評の掲載の仕方は,多くの場合,プログラムにそって演目をひとつひとつ順に取り上げ,批評していくという方法である。その中で,瀧廉太郎の演奏が取り上げられたのである。当時の新聞・雑誌は,彼の演奏活動の様子を,時には好意的に,時には批判の目でもって伝えている。

瀧廉太郎は、明治34年にドイツ留学をするが、留学関係の情報も、新聞・雑誌記事からのものが少なくない。彼が、留学生候補者として注目されるようになるのは、明治32年頃からである。演奏者として期待されるようになった彼は、音楽留学生の候補者としても嘱目されるようになり、それに伴い、留学関連の記事が増えてくる。

留学関係の資料は、公文書として『在外研究員関係』10の他、留学中のドイツから日本の家族

平成 29 年 10 月 31 日受理

<sup>\*</sup>まつもと・ただし 大分大学教育学部芸術・保健体育教育講座(音楽科教育)

や友人に宛てた書簡等があり、留学の手続きや留学中の様子を知ることができる。一方、新聞・雑誌記事からは、留学生としての瀧廉太郎に対する期待や留学決定に至るまでの曲折の状況など、公文書や書簡からは読み取ることができない情報を得ることができる。

新聞や雑誌記事は、それを報告・記述する人の主観がしばしば反映するものの、記述内容の 事実関係を精査して活用すれば、彼の音楽活動等の状況を把握する資料になるとともに、当時 の音楽界やそれをとりまく社会が、彼をどのように見ていたのかを知ることのできる貴重な資 料にもなる。

ところで、大分県教育委員会は、先哲叢書シリーズの一環として、平成6年に『瀧廉太郎資料集』(以下『資料集』)を、平成7年に評伝『瀧廉太郎』(以下『評伝』)を刊行した。『資料集』には、2年間にわたる資料調査の成果として瀧廉太郎関連の主要な資料を網羅的に収録するとともに、それらの資料をもとに記述された『評伝』は、瀧廉太郎研究の集大成としての位置づけをもっている。それから20年以上が経過したが、資料調査は、その後も筆者によって継続され、新たな資料も見出されてきた。それは、新聞・雑誌記事において著しい。本稿は、そうした資料を目録としてまとめ、報告するものである。本稿のIIIがその中心部分になる 20。また、新聞・雑誌記事の総目録とするため、先行研究や既存文献における新聞・雑誌記事についても、IIIで目録としてまとめている 30。

本稿では、扱う新聞・雑誌記事を、先行研究・既存文献におけるものと新たに確認されたものに区分しているが、その基準は平成 7 年の『評伝』に置いている。具体的には、本稿では、この『評伝』を含めて、これより以前に研究で扱われたり、これより以前の文献に収録されたりしたものを、「先行研究・既存文献における新聞・雑誌記事」とし、『評伝』公刊後に見出すことができたものを、「新たに確認された新聞・雑誌記事」としている。

## Ⅱ 先行研究・既存文献における新聞・雑誌記事

上述したように、本節では、平成7年までの先行研究や既存文献における新聞・雑誌記事を まとめた。

#### 【凡例】

- ・新聞では、掲載年月日、記事名を、雑誌では掲載年月、巻号、記事名を収録している。また、新聞、雑誌ともに、最後に記事内容を分類するためのキーワードを示している。
- ・著者の記載が記事にある場合には、記事名の後に()で示している。
- ・筆者による補筆箇所は、〔〕で示している。主として演奏会に関連する記事において、記事名から、その記事の対象なった演奏会の名称が判断できない場合に使用している。

#### 1 新聞記事

#### (1)『読売新聞』

・明治31年3月18日 「朝鮮学生補助義捐音楽会」 演奏会案内
 ・明治31年3月22日 「朝鮮学生補助義捐音楽会の景況」 演奏評
 ・明治31年4月26日 「同声会春季演奏会」(なにがし) 演奏評
 ・明治31年5月2日 月曜附録「土曜日の音楽」(藤村) 演奏評

		>
・明治 31 年 6 月 11 日	「学友会音楽会」	演奏会案内
・明治 31 年 9 月 24 日	「明治音楽会演奏曲目」	演奏会案内
• 明治 31 年 10 月 5 日	「明治音楽会批評(三)」(神樹生・霞里生)	演奏評
・明治 31 年 11 月 25 日	「同声会秋季大会(承前)」(楽石生)	演奏評
・明治 31 年 12 月 11 日	「音楽学校秋季演奏会」(楽石生)	演奏評
<ul><li>明治32年5月3日</li></ul>	「明治音楽会第十三回演奏会」(楽石生)	演奏評
・明治 32 年 5 月 11 日	「同声会春期演奏会(承前)」(楽石生)	演奏評
・明治 32 年 5 月 12 日	「同声会春期演奏会(承前)」(楽石生)	演奏評
・明治 32 年 7 月 13 日	「東京音楽学校卒業式音楽演奏会」(楽石)	演奏評
・明治 32 年 11 月 23 日	「秋季音楽演奏会曲目」	演奏会案内
・明治 32 年 12 月 4 日	「音楽学校秋季大演奏会批評」(黄華生)	演奏評
・明治 32 年 12 月 9 日	「近時の二演奏(承前)」(楽石生)〔音楽学校秋季	
	演奏会〕	演奏評
·明治 33 年 3 月 22 日	「青年会館慈善音楽会(つゞき)」(楽石生)	演奏評
・明治 33 年 12 月 10 日	はがき集「音楽学校秋季演奏会」	演奏評
・明治 33 年 12 月 11 日	「音楽学校秋季演奏会の光景」	演奏評
・明治 34 年 3 月 20 日	よみうり抄 音楽界彙聞〔瀧送別演奏会〕	演奏会案内
・明治 34 年 3 月 20 日	よみうり抄 音楽界彙聞	中学唱歌
<ul><li>明治34年4月5日</li></ul>	「中学校用唱歌」	中学唱歌
・明治 34 年 4 月 14 日	「慈善音楽会小言」(東雲の友)	留学
・明治 34 年 5 月 10 日	よみうり抄「中学用唱歌披露会」	中学唱歌
・明治 34 年 5 月 14 日	よみうり抄「中学用唱歌披露演奏」	中学唱歌
・明治 34 年 5 月 20 日	よみうり抄「中学唱歌演奏会」	中学唱歌
<ul><li>明治34年5月27日</li></ul>	「次回月曜文学飛入評募集」	中学唱歌
<ul><li>明治34年6月3日</li></ul>	月曜文学(第七)「音楽学校編『中学唱歌』附同音楽	
	会」	中学唱歌
・明治 34 年 6 月 10 日	月曜文学(第七)(接前)「音楽学校編『中学唱歌』	
	附同音楽会」	中学唱歌
(2)『毎日新聞』		
・明治 29 年 12 月 12 日	「学友会の音楽演奏」	演奏会案内
・明治 30 年 5 月 12 日	「同声会音楽評(上)」(さヽこ生)	演奏評
・明治 30 年 11 月 5 日	「洋楽漫言」(撃磬子)	人物評
・明治 30 年 12 月 2 日	「楽堂余塵(中)」(撃磬子)[同声会秋季演奏会]	演奏評
<ul><li>明治31年1月4日</li></ul>	「学友会演奏評」(撃磬子)	演奏評
<ul><li>明治31年1月6日</li></ul>	「楽界零語」(げきけい)	人物評
・明治 31 年 3 月 26 日	「隣邦扶助大音楽会(下)」(聴琴生)	演奏評
·明治 32 年 12 月 7 日	「日本音楽会演奏会(下)」(	演奏評

## (3)『国民新聞』

・明治 31 年 4 月 23 日 「同声会音楽会」 演奏会案内 ・明治 31 年 6 月 11 日 「音楽学校学友会」 演奏会案内 ・明治 31 年 12 月 2 日 「音楽学校演奏会」 演奏会案内 ・明治 32 年 3 月 23 日 音楽界彙聞 中学唱歌 ・明治 32 年 5 月 2 日 美術と音楽 中学唱歌 ・明治 32 年 5 月 27 日 美術と音楽 留学

## (4)『東京日日新聞』

·明治 33 年 6 月 5 日 「高等師範学校附属音楽学校試業会」 演奏会報告

#### (5)『都新聞』

・明治 34 年 5 月 23 日 「中学唱歌演奏会」 中学唱歌

#### 2 雑誌記事

### (1)『おむがく』(共益商社書店)

・明治 29 年 12 月	64 号	雑報「音	音楽学校学友会演奏会」	演奏会報告
· 明治 30 年 2 月	66 号	文苑「砧	占」(瀧廉太郎)	作品
·明治 30 年 3 月	67 号	歌曲「日	日本男児」(瀧廉太郎)	作品
· 明治 30 年 5 月	69 号	雑報「春	F季音楽大演奏会」	演奏会報告
・明治 30 年 10 月	73号	歌曲「散	女歩」(瀧廉太郎)	作品
・明治 30 年 10 月	73号	雜報「学	卢友会臨時音楽会」	演奏会案内
・明治 30 年 11 月	74号	評林「学	学友会臨時音楽演奏会の記」(楽友稿)	演奏評
・明治 30 年 12 月	75 号	文苑「杜	古野の夕景」(瀧廉太郎)	作品
・明治 30 年 12 月	75 号	歌曲「命	かを捨てヽ」(瀧廉太郎)	作品
・明治 30 年 12 月	75号	雑報「芝	艺唱歌会紀念会」	演奏会報告
· 明治 31 年 1 月	8年1号	雜報「学	牟友会演奏会」	演奏会報告
・明治 31 年 2 月	8年2号	雑報「学	牟校唱歌講習会」	演奏会報告

## (2)『音楽之友』(楽友社)

・明治35年2月 1巻4号 人物月旦「ピアノ専攻瀧廉太郎先生」 人物評
 ・明治35年6月 2巻2号 雑報「瀧廉太郎氏の病状」 留学

#### (3)『同声会雑誌』(高等師範学校附属音楽学校同声会)

・明治 29 年 12 月 4 号 「音楽学校学友会演奏曲目」 演奏会報告
 ・明治 30 年 8 月 6 号 「春季音楽演奏会記事」 演奏会報告

#### (4) 『学友会会誌』(高等師範学校附属音楽学校学友会)

・明治30年7月 5号 「春の海」(瀧廉太郎)\* 作品

\*『音楽之友』(第5巻第8号, 昭和22年11月, 音楽之友社) による。

## (5) 『学友会々誌』(東京音楽学校学友会)

・明治 34 年 12 月 9 号 [留学記念送別会] \* 留学 \*遠藤宏『明治音楽史考』(昭和 23 年, 有朋堂) による。

#### (6)『官報』(内閣官報局)

·明治 31 年 7 月 13 日 4510 号 学事「高等師範学校附属音楽学校卒業證書

 授与式」
 演奏会報告

 •明治 33 年 6 月 13 日 5082 号 叙任及辞令
 留学

・明治 34 年 4 月 1 日 5320 号 学事 留学 ・明治 35 年10 月 30 日 5798 号 学事 留学

## (7)『女学雑誌』(女学雑誌社)

明治31年7月 468 号 雑録「忍が岡演奏会の素人評(附)明治 音楽会」(青柳有美) 演奏評 雑録「同声会秋季音楽演奏会」(青柳有美) · 明治 31 年 12 月 477 号 演奏評 · 明治 31 年 12 月 477 号 雑録「音楽学校秋季音楽会」(青柳有美) 演奏評 · 明治 32 年 4 月 雑録「瀧廉太郎と橘絲重女史」(無草庵有美) 485 号 人物評 · 明治 32 年 5 月 488 号 雑録「同声会春季演奏会」(青柳生) 演奏評

## (8) 『太陽』(博文館)

・明治 31 年 11 月 4 巻 22 号 「現時の音楽界と音楽学校」(坂部行三郎)

 「卒業演奏会」
 演奏評

 ・明治32年3月
 5巻5号
 文芸界雑爼〔豊太閤〕
 中学唱歌

 ・明治32年4月
 5巻7号
 くさぐさ〔豊太閤〕
 中学唱歌

#### (9)『帝国文学』(大日本図書株式会社)

・明治 32 年 7 月5 巻 7 号音楽界留学・明治 33 年 1 月6 巻 1 号音楽界〔音楽学校秋季演奏会〕演奏評・明治 33 年 7 月6 巻 7 号音楽界留学

## (10)『教育時論』(開発社)

・明治 31 年 7 月 477 号 「音楽学校卒業式」 卒業式報告

#### (11)『明星』(東京新誌社)

・明治 33 年 8 月 5 号 文芸雑俎 留学

## (12)『日本美術』(日本美術院)

•明治 34 年 6 月 29 号 「中学唱歌披露会管見」(塩田力蔵) 中学唱歌

## (13)『美術新報』(東西美術出版社)

・明治35年4月5日 1巻2号 東西南北 留学

## (14)『基督教週報』(基督教週報社)

・明治 33 年 11 月 9 日	2 巻 10 号	雑報「博愛教会」	洗礼
· 明治 34 年 6 月 28 日	3 巻 17 号	個人	留学
・明治 34 年 11 月 15 日	4 巻 11 号	個人	留学
・明治 35 年 9 月 12 日	6 巻 2 号	個人	留学

#### (15)『直入郡高等小学校同窓会雑誌』(直入郡高等小学校同窓会事務所)

<ul><li>明治27年3月</li></ul>	7号	「以ろは歌」(会員瀧廉太郎)	その他
・明治 27 年 12 月	10 号	「瀧廉太郎氏ノ書簡」	その他
·明治 28 年 6 月	12 号	「勘定の誤りを見出す」(在東京瀧廉太郎)	その他
·明治 28 年 6 月	12 号	「懶惰者の夢」(在東京瀧廉太郎)	作品
・明治 36 年 10 月	45 号	「故瀧廉太郎君」(会員野田豊)	人物評
・明治 36 年 10 月	45 号	訃音	その他

## (16) 『暘谷雑誌』(暘谷会)

 ・明治 29 年 1 月 6 号
 雑報「会員氏名及現今の境遇」
 その他

 ・明治 32 年 12 月 復刊第 4 号
 雑報「東京便り(堀節蔵)」
 その他

 ・明治 34 年 5 月 号不詳
 [留学送別の宴]\*
 留学

## Ⅲ 新たに確認された新聞・雑誌記事

本節の1と2では、『評伝』刊行後に新たに確認された新聞・雑誌記事を収録する。3では、その中で注目される記事を取り上げ、その記事が資料としてもつ意味や記事の背景等について解説を行う。

なお、凡例は、前節のⅡに準じるが、それに加えて、瀧廉太郎に言及している箇所、あるいは瀧廉太郎の名前の記載のある箇所を抜粋して掲載している。また、原文において明らかに誤植と判断される場合には、その箇所に〔〕で正しい文字を示した。

#### 1 新聞記事

#### (1)『読売新聞』

①明治31年9月27日 秋風録〔尋常中学校長視察演奏会〕

演奏会報告

予て中学校長会議の一問題たりし音楽を正科とするの可否に付校長等に音楽の必要と其趣味とを知らしめんため一昨日午後二時より音楽学校に於て一大演奏会は開かれぬ矢田部校長先づ立て其正科となすの必要を一言し「進め矢玉」「須磨明石」「我海軍」「ますら武夫」等の数曲は高等師範学校附属尋常中学生徒十六名と同校生徒二十名と合唱し他に「馬上の少年」「八洲の民」「大鵬」等は同校生徒のみにて和唱し猶「埴生の宿」「薩摩潟」は女生徒歌ひ余

<sup>\*</sup>大竹義則「滝廉太郎といとこ大吉」(『大分合同新聞』昭和43年6月29日) による。

興として幸田かう子のヴァイオリン独唱 [独奏] 瀧廉太郎氏のピアノ独奏あり四時頃散会せりと

- ②明治 32 年 1 月 12 日 「第十一回明治音楽会夜の部所見」(夕風生) 演奏評 第二 音楽界の麒麟児と呼ばるゝ瀧廉太郎氏の「バラーデ」さして難曲にもあらざれば大体に於て麗しかりきとの賛辞を呈せむ「エキスプレッション」の工合も至極巧みなりし様覚えき、只いつも乍ら氏に望ましきは体形の今少し正しからむこと之れなり、別のことにはあれど椅子の上に三枚の蒲団を敷き其上に腰かけられしにはちと閉口しぬ今少しよき椅子をおごられては如何
- ③明治 32 年 3 月 23 日 よみうり抄 留学 東京音楽学校の教師瀧連太郎 [廉太郎] 氏は遠からず独国留学を命ぜらるよしにて目下頻りに独逸語研究中なり
- ④明治 32 年 5 月 30 日 よみうり抄 音楽界雑事 留学 幸田幸子嬢は音楽研究のため三年間澳国に留学を命ぜらる猶今秋迄には瀧廉太郎氏も独逸 へ留学を命ぜらるべしと
- ⑤明治32年12月10日 「近時の二演奏(承前)」(楽石生)〔日本音楽会演奏会〕 留学 二日の日本音楽会に於ける音楽学校連の出し物は全然二十六日のと同一にて頼母木嬢の「ヴヮィオリン」独奏、瀧氏の「ピアノ」及び生徒諸氏の合唱四曲なりき一般に前より聞き 劣りせしは室の加減と覚ゆ(後略)
- ⑥明治 32 年 12 月 12 日 「近時の二演奏(承前)」(楽石生)[音楽学校秋季演奏会]演奏評第三に目に付きしは生徒が教師の振りのみ真似る事なりもとより弟子の師匠を見習ふに不思議はなけれど其悪しき所まで真似るは好ましからず瀧氏の「ケーベル」氏を気取るも久敷ものなるが近来一層甚しく臆面なく云へば甚だ以てきざなり先頃万朝報にても此評ありしが余も大に氏の猛省を望むものなり此他にも「ユンケル」氏を気取る「ヴィオリニスト」ありと聞く諸君は堂々たる一個の男子ならずや何ぞ形体の末まで他人を真似る必要あらむ各自の「オリジナル」を出す勇気なくてはならず人を見習はんより人に見習はしめよとは忘るべからざる格言なり
- ⑦明治 33 年 2 月 23 日 よみうり抄「音楽学校長の演説」 講演案内 来る二十五日午後一時より神田一ツ橋外帝国教育会内に於て開会する東京府通常教育会席 上に於て音楽学校長渡邊龍聖氏は「音楽の価値に就て」と云ふ演題にて音楽が人心に及ぼす 感化を同校の教師頼母木瀧等諸氏の技術を以て実例を示し詳細に講説する由
- ⑧明治33年6月14日 「文部省の海外留学生」 留学 一昨日左の数十名を海外留学生に任命せり(中略)△ピアノ及作曲(三年)独 瀧廉太郎 (後略)
- ⑨明治 34 年 2 月 25 日 よみうり抄 音楽界雑聞 留学 ピアノ研究の為め今回独乙へ留学を命ぜられたる瀧廉太郎氏は来る四月六日頃出発の予定 なりと
- ⑩明治35年4月29日 「明治の令嬢 鈴木淑子」 留学 ピアノの名手として,東京音楽学校卒業生中其技を擅にするもの,遠山甲子子\*あり。橘糸 重子あり。山縣菊子あり。瀧廉太郎氏あり。瀧氏は文部省海外留学生となりて,目下独逸伯林に在り。ピアノ研修の留学生として抜擢されしもの,蓋し氏を以て嚆矢とすべし。(後略)

\*「甲子子」は「きねこ」と読む。

⑪明治 35 年 10 月 19 日 よみうり抄「瀧氏と幸田氏」

留学

昨年音楽研究のため独逸へ留学を命ぜられたる瀧廉太郎氏は病気の為め昨日帰朝したり又 文部留学生幸田幸子は目下伯林音楽院に在り校長ヨハヒム氏に就き研究中なりと

②明治35年10月24日 「独逸の音楽界と幸田幸子女史」

留学

東京音楽学校の卒業生にて、先頃独逸へ留学せし瀧廉太郎氏が、本月十七日病気の為帰朝 せしを訪ひて、同国音楽界の近況を聞込たれば、少しく左に紹介せんに、同氏は昨年五月十 八日独逸に着し、伯林よりライプチヒに至りしが、其頃は暑中休暇も近寄り、コンセルバト リユムに入学せんには、十月一日よりならでは叶ひ難きより、暫くピアノの大教授ダイシミ ルラーの弟子、ウイラセニョル氏に就て教授を受け、ダイシミルラー氏の厚意にて、折節同 氏より其曲を授けられたる程に、入学試験を受る事となりしが、我国の試験とは異りて、彼 方にては唯一曲を奏さしめ、及第すれば其人の名前を呼び、呼ばざるを以て落第者とす。其 教授法の如きも、予て生徒より教を受けたき教師の名前を願置く習慣ながら、教師は开を承 引するもせざるも勝手なれば、承知せざる時は其望叶はず。瀧氏は規定に依りて、ダイシミ ルラー氏の教を受くる事となり、十一月廿三日迄登校して、作曲は本年二月死亡せしヤダス ソオン氏の教を受けたり。瀧氏の見聞に依れば、我斯道の名手と彼方にて出来の好き卒業生 とを比較すれば、さのみ甲乙なき程にて、我にありては年限の短き割合には其発達著しと謂 ふべく、年代も長き事なれば、彼方にては従つて名手多く、学生中にも却々の名手あり。作 曲に就ては、我と彼とは、雲泥の相違にして、到底彼に比ぶべくもなし。尚目下伯林にバイ オリンの研究中なる幸田幸子氏は、昨年四月以来名手ヨアヒム氏に就て教を受け居るが、其 入門の時は彼国の規定にて試験を受け、直に同氏の承諾を得、門に入りしだけありて、幸田 氏の成績極めて好く、今は同門中の評判となり居るは、我音楽界の名誉といふべく、同氏は 去月遊学満期となりたれど、以後は自費にて今少しく研究せんと、先頃文部省に出願して其 許可を受けたる由。

## (2)『毎日新聞』

- ①明治 30 年 8 月 1 日 「楽声余韻 (承前) 音楽学校卒業演奏会概評」(さ、こ生) 演奏評 (前略) 国学院の「きよ」氏が嘗て橋本氏の技芸を評して「氏の手の運びざまは洋琴上に 双蝶の狂ひ戯れるかと疑はれたり」と称賛せしは何故なるかを知らず或は去年「女学雑誌」 が由比嬢を激評せる場合と均しく四人連弾に於ける氏の位置は独り氏が指頭の運動のみを聴者に示せるが為めならむか若し技芸の点よりすれば氏は二年生なる瀧氏にすら及ばざるなり (後略)
- ②明治 32 年 4 月 30 日 東京音楽学校彙報

留学

▲留学生の競争 音楽学校より派遣すべき留学生の候補者は瀧廉太郎に内定せりと聞き幸田教授は妹幸子の為めに競争運動中なり▲視察員派遣せず 同校教授某氏は同校卒業生の団体なる同声会総集会の決議なりと称して過日上田局長を訪ひ此際欧洲へ音楽実況視察員を派遣せられんことを希望したれど文部当局者は絶対的に視察員派遣の意思なく瀧氏をして留学の序に視察を命ずべしと

③明治32年5月21日 楽界彙聞「音楽留学生」

留学

本年文部省より独逸へ派遣する音楽留学生は瀧廉太郎氏(ピアノ専門家)に内定せしに幸田延子は妹幸子をして此選に当らしめんとて頃日来非常に運動せる為め或は前議を翻して音楽の留学生として女子は其任に適せざるに拘はらず先年官命を以て欧洲に遊べる姉と同じくバイオリンを専修せる幸田幸子を留学せしむるに至るやも知れず

④明治32年7月20日 音楽界彙報

留学

瀧廉太郎氏は来る十一月頃ピアノ及び「和声」研究の為め満三年間独逸国へ留学を命ぜらるゝならん

## (3) 『国民新聞』

①明治31年11月25日「同声会秋季演奏会素人評」

演奏評

(前略)幸田延子のヴァイオリン独奏(ウィニアウスキ氏作レゲンテ)は瀧廉太郎氏のピアノ伴奏にて曲の解り易かりしためか尤も面白かりしされど延子氏としては通常の出来のみ別段努めたる様にも見えず

- ②明治31年12月1日 音楽界彙聞〔音楽学校秋季演奏会〕 演奏会案内 四日午後一時半より音楽学校にて生徒の試業演奏会を開らき幸田嬢姉妹のヴァイオリン合 奏、ケーベル氏のピアノ独弾等あり瀧氏内田氏も出席すべく生徒のコーラスは都合八にて内 二は単音唱歌なりと
- ③明治31年12月9日 「音楽学校秋季演奏会評」 演奏評 (前略) 瀧廉太郎氏のピアノ独奏は大部ケーベル氏に摸せられたる如くなりしが弾法忠実 ならず (中略) 最後の唱歌『天の岩戸』は管絃合奏にて非常に大仕掛なりしが矢張り人の割合に声低く瀧氏のベースの如きは余程苦しき様子に見受けたり
- ④明治32年1月3日 「新年の明治音楽会」 演奏会案内 (前略) 尚夜之部は右曲目の中フアロート嬢の洋琴が瀧廉太郎氏の洋琴独奏 (ラインベル ゲル氏作曲バラーデ) に入れ代はり (後略)
- ⑤明治 32 年 2 月 19 日 「音楽学校臨時演奏会」 演奏会案内 音楽学校にては今回貴衆両院議員を招待して臨時演奏会を開らく由期日は多分来月第一土 曜若くは日曜なるべしと演奏曲目は生徒一同の『単音唱歌』(中略) 瀧廉太郎氏の『ピアノ独奏』(中略) と略決定したり
- ⑥明治 32 年 3 月 14 日 音楽界彙聞〔文部大臣招待演奏会〕 演奏会報告 十三日午後樺山文部大臣は上田専門学務局長,樺山秘書官を従へ音楽学校の招待に応じ瀧 廉太郎氏のピアノ独奏,中村,岡野両氏のデウエット(船出)生徒一同の重音唱歌(薩摩潟) 及ヴアィオリン合奏,単音唱歌等を聞きし由
- ⑦明治32年3月25日 音楽界彙聞 留学音楽学校独立の風説は現内閣組織の当時より屡伝へられし處なるが四月一日より愈々決行せらるゝ事となり同時に主事渡邊龍聖氏は高等師範学校教授専務となるべし◎右と同時にピアノの名手瀧廉太郎氏及ヴァイオリニの名手幸田幸子氏は前後して独逸又は墺地利に留学を命ぜらるべし
- ⑧明治32年5月4日 美術と音楽[同声会春季演奏会] 演奏会案内 同声会演奏会は廿日開会のやうに記載せしが急に七日(日曜)の事となり曲目は生徒諸氏の合唱、幸田幸子山縣菊子のヴァイオリン及ピアノ合奏、瀧廉太郎氏のピアノ独弾、(後略)

⑨明治32年5月11日 「同声会春季演奏会」

演奏評

(前略) 瀧廉太郎氏のピアノ独奏は愈出でゝ愈ケーベル氏なるが如く質素にして毫も浮華ならず発相に当てし非常の上出来なりき(後略)

⑩明治32年6月20日 音楽界彙聞〔卒業演奏会〕

演奏会案内

右卒業式は来月九日\*午後三時より校内にて開かれ幸田幸子のヴァイオリン独奏,瀧,前田,神戸,山縣四氏のピアノ連弾及管絃楽,合唱歌あり其中は新作大曲にて管絃伴奏なりと\*寒際には8日に開催された。

①明治33年2月24日 講演と奏楽〔音楽学校長講演実地演奏〕 講演案内 廿五日午後一時より一ツ橋帝国教育会楼上に於て音楽に就て渡邊東京音楽長校長〔学校長〕 の講演あり引続き実地に演奏あり曲目は瀧廉太郎氏のピアノ独奏、頼母木コマ子のヴワィオ リン独奏、音楽学校生徒諸氏の合唱歌等なりと

迎明治33年12月1日 「音楽学校秋季演奏会」

演奏会案内

準備の都合により九日に延ばされたり今回の重なる演奏は瀧廉太郎氏のピアノ独奏(氏は来春独逸に留学する故此の演奏は名残なり),島崎赤太郎氏の風琴独奏,頼母木コマ子のバイオリン独奏,管絃楽三曲他に合唱歌等あり 皇后陛下の行啓あらるべしと伝らる

#### (4)『中央新聞』

①明治 31 年 4 月 27 日 「同声会音楽演奏会素人評」(朗々生) 演奏評 (第七)橋本,瀧両氏のピアノ連弾シンフオニー第一番は相応の出来なれどもベース演奏 少しくソプラノ演奏より強くして時にメロジーの聞取れざるは遺憾なりき

②明治31年12月3日 「音楽学校演奏会」

演奏会案内

明四日午後一時半より上野奏楽堂に開く番組は左の如し ピアノ独奏 (瀧廉太郎), (後略)

③明治34年4月1日 「瀧廉太郎の送別音楽会」

留学

今回ピアノ及び作曲学研究の為欧洲に留学する現代有数のピアニストと称せらる、瀧廉太郎氏の為め氏の友人等打集り昨日上野なる東京音楽学校に於て送別の音楽会を開きたりと、尚氏は来る六日横浜出帆の讃岐丸\*にて出発する由なるが今後暫らく氏の妙技を聞くを得ざるは好楽家の遺憾とする處なりと

\*実際に乗船したのは、ドイツ船ケーニッヒ・アルベルト号である。

## (5)『万朝報』

①明治 32 年 11 月 29 日 「秋季音楽会」(愛隈生)[音楽学校秋季演奏会] 演奏評 (前略)同校の俊才との評判ある瀧廉太郎氏のピアノ独奏も失敗といふの他なく前年の技 傾は何處へ行きしやと疑はるゝ許なりしがこは氏が余りに其教師ケーベル氏を真似て其長所 はさておき其悪癖に感染せしに由るに非ざるなきか氏が身体の動かし方といひ其曲の調べ方 といひー々ケーベル氏を気取るの様子見えて極めて見悪し氏たるもの速に悟る所ありて之を 改めずんば其進路はこゝに止まらん(後略)

#### 2. 雑誌記事

(1)『天地人』(三才社)

- ①明治32年1月 13号 「去年の音楽界」(N.P.) [音楽学校秋季音楽会] 演奏評 (前略)氏 [ケーベル] の教を受けし瀧廉太郎氏はバヒ氏作なるイタリエニツシエス,コンセルトを奏せしが,其奏法によりてケーベル氏の門人たるを推知すべく,その奏法の清朗正確なるを賞すべきのみ。瀧氏は実に恰好なるピアニストにして,前途多望の人なり。(後略)
- ②明治 32 年 8 月 20 号 「近時の音楽会 音楽学校卒業式演奏会」(N.P.) 演奏評 (前略)ピアノには、先づモヅアルト作のウーヴェルチユール (房楽)を弾したり。元来 此曲は管絃楽の為めに作りたるものなるを、改作して二個のピアノ、八個の手(弾手四人)にて弾したるなり。即ち一個のピアノにては瀧廉太郎氏、前田某氏之を弾し、他は橘助教授 及卒業生神戸綾子の二嬢之を奏せられたり。吾人は是等諸氏が、此曲を弾ずるに充分なる技 価を有せらるゝを認めたりと雖とも、往々拍子の乱るゝ嫌ありたるは、多少曲の興味を減殺 せしめたるの感あり。(後略)
- ③明治 33 年 1 月 26 号 「秋季音楽演奏会」〔音楽学校秋季演奏会〕(カサレス) 演奏評 (前略) 瀧廉太郎氏はベートウェン作の F 大音譜ピアノのソナタを奏せられたり。其イン タルプレテーション(解し方)は所々頗る当を得たるものありしも総体に於て多少統一,調和を欠きたるの観ありき,是れ或は氏が意を用ふるに過ぎたるの致す處ならむ。(後略)
- ④明治 33 年 1 月 26 号 「日本音楽会」(ペリー) 演奏評 (前略) 曲譜は去る十一月廿六日音楽学校諸氏が演奏したるものを繰返したるものなりき。 即ちカシオリーニ,ハイデン,クレムセール,等の作及メンデルソーンの四ツの合唱なりき。 其内頼母木嬢はトメ作アンダンテ,レリヂオゾ諸氏 (瀧氏) はベートウエンのソナタをば弾せられたる。
- ⑤明治 33 年 12 月 49 号 「東京音楽学校秋季音楽演奏会概評」(トロンコア) 演奏評 (前略) 尋で瀧廉太郎氏は、曲目に示されざりし狩猟と称するメンデルソン作第三のリード、オーネ、ヴオルテを弾ぜられしが、惜しむべき哉、予め人々の期待せし程にはあらざりき。ピアノの前に氏の体容の余りに屈曲せしを見れば、蓋し氏は疲労し在りしか、又は梢々不快にても在りしにや。孰れにせよ之よりも巧に氏の弾じ得るは、余の信じて疑はざる處なれば、今回の成績のみを以て氏の技倆を云々するは余の欲せざる處なり。
- (2) "Ost=Asien. Monatsschrift für Handel, Industrie, Politik, Wissenschaft, Kunst etc."
- ①1901 年 6 月 4 巻 3 号(通巻 39 号)"Japaner in Deutschland. 在独逸日本人" 留学Berlin:

Taki, Rentaro, Neue Winterfeldstr. 56a.

②1901 年 7 月 4 巻 4 号(通巻 40 号) "Japaner in Deutschland. 在独逸日本人"留学 Leipzig:

Taki, Rentaro, Musiklehrer, Ferdinand Rhodestr. 7.

③1902 年 8 月 5 巻 5 号(通巻 53 号) "Japaner in Deutschland." 留学 Leipzig:

Taki, Rentaro, Musiklehrer, Ferdinand Rhodestr. 7.

④1902 年 9 月 5 巻 6 号(通巻 54 号)Vermischtes 雑報"Nach Japan." 留学 August:

Dr. med. Hiroshi Sasaki, Rentarō Taki ( » Wakasa-Maru « , 24. August von

Antwerpen aus), Dr. med. Hida, Yoshio Takimoto etc. haben im August Deutschland verlassen.

#### 3 解説

以上の新聞・雑誌記事の中で注目されるものに関して、大きく演奏関連と留学関連の2点から解説しておく。なお、新聞・雑誌名の後の数字は、本節の1と2に収録している当該新聞・雑誌記事の数字に対応している。

## (1) 演奏関連記事

『評伝』公刊時点で確認されている、瀧廉太郎が公の場で演奏を行った回数は、音楽学校内部のものを含めて 22 回である。その後の調査により、彼が新たに 4 回の演奏を行っていたであろうことを新聞記事で確認することができた。以下は、その新聞記事と演奏会である。

## 『読売新聞』(1)

尋常中学校長視察演奏会 (明治31年9月25日)

『読売新聞』②, 『国民新聞』④

第十一回明治音楽会演奏会 (明治 32 年 1 月 4 日)

『国民新聞』 ⑤, ⑥

文部大臣招待演奏会 (明治32年3月13日)

『読売新聞』⑦, 『国民新聞』⑪

音楽学校長講演実地演奏 (明治 33 年 2 月 25 日)

## 『読売新聞』(1) 秋風録 [尋常中学校長視察演奏会]

この記事は、明治31年9月に開催された全国尋常中学校長会議において、「唱歌を必須科とするの可否」が議事に付され、審議の参考とするために、校長有志約50名が9月25日に音楽学校を視察訪問した際の記事である。この記事により、校長の矢田部が唱歌の必要性を述べた後、生徒代表の1人として瀧廉太郎が独奏を行ったことが新たに判明した。演奏曲目については不明である。

#### 『読売新聞』② 「第十一回明治音楽会夜の部所見」(夕風生)

## 『国民新聞』 ④ 「新年の明治音楽会」

瀧廉太郎が、当時の音楽団体である明治音楽会の第 11 回演奏会に出演し、ラインベルガーの「バラード」を演奏したことを示す資料である。明治 32 年 1 月 4 日に開催された演奏会は、昼夜 2 回行われた。これらの記事から、演奏者の 1 人、フロート嬢は昼夜それぞれの演奏会に出演予定であったが、夜の部では何らかの不都合が生じ、急遽、瀧廉太郎が代役として出演していたことがわかる。

#### 『国民新聞』(5) 「音楽学校臨時演奏会」

## 『国民新聞』⑥ 音楽界彙聞〔文部大臣招待演奏会〕

明治32年3月13日に,音楽学校が文部大臣を招待して開催した演奏会において,瀧廉太郎

が音楽学校の代表の 1 人として独奏を行ったことを示す記事である。⑤は演奏会前の記事で、招待予定者は貴衆両院議員となっているが、演奏会後の記事⑥では、最終的に文部大臣が招待に応じたと伝えている。この頃、瀧廉太郎は、すでに音楽学校専修部を卒業し、研究科に籍を置いて、ピアノの研鑽を積んでいた。一方、音楽学校は、この年の4月4日に勅令により高等師範学校の附属から、単独の官立学校として独立する。文部大臣が訪問したのは、独立を控えた1ヶ月前である。少なくとも音楽学校は、この招待演奏会において、独立するにふさわしい学校であることを、示しておく必要があったであろう。この記事をそうした背景と重ねることで、瀧廉太郎の演奏が重要局面での演奏であるとともに、彼が、音楽学校の実力を示すうえで、十分な役割を果たしたであろうことが推測できる。

#### 『読売新聞』⑦ よみうり抄「音楽学校長の演説」

## 『国民新聞』① 講演と奏楽〔音楽学校長講演実地演奏〕

東京府教育会において音楽学校長の渡邊龍聖が「音楽の価値に就て」と題して行った講演において、瀧廉太郎が実地演奏を行ったであろうことを示す資料である。ただし、講演前の案内記事であるため、確定はできない。また、演奏曲目も不明である。この時期、音楽学校では、中等唱歌集出版の編集作業が進行していた 4)。講演そのものは、学校教育、特に中等教育における唱歌普及のまたとない機会であったろう。こうした背景の下に開催される予定の講演において、瀧は、校長より実地演奏を依頼されていたのである。

以上が、『評伝』出版後に見出された、瀧廉太郎が新たに演奏を行った、あるいは行ったであろうことを示す資料である。

次に、演奏を行ったことはすでに確認されているものの、演奏内容に関して新たな情報を得ることができる資料について触れておきたい。

まず、注目されるのは、ケーベルとの関係に言及した資料が散見されることである。

『読売新聞』⑥ 「近時の二演奏(承前)」(楽石生)[音楽学校秋季演奏会]

『国民新聞』③ 「音楽学校秋季演奏会評」

『国民新聞』 9 「同声会春季演奏会」

『万朝報』① 「秋季音楽会」(愛隈生)[音楽学校秋季演奏会]

『天地人』① 「去年の音楽界」(N.P.) [音楽学校秋季音楽会]

ケーベルとの関係を示す資料は、II において収録している明治 32 年 5 月 11 日付と 12 月 7 日付の『読売新聞』、同年 12 月 7 日付の『毎日新聞』、明治 31 年 7 月号の『女学雑誌』の記事 4 点が、これまでに確認されていた。ケーベルは、東京帝国大学で哲学の教鞭をとっていたお雇外国人教師で、明治 31 年に兼任講師として音楽学校で瀧廉太郎にピアノを教授した。これら既存の新聞・雑誌記事からは、「師匠の悪き癖を其儘に学び得たるは如何にも眼障とや云はん気障なりとは云はん」(『毎日新聞』)、「其弾法によりて察するに頗るケーベル博士に私淑するに似たり」(『女学雑誌』)等の記述より、瀧がケーベルに影響を受けていたことがわかっている。その後の調査で標記の 5 点の記事がさらに見出された。『国民新聞』 ⑨と『天地人』 ①の記事 2 点は、好意的に捉えているのに対して、残り 3 点の記事は、「氏が身体の動かし方といひ其曲の調べ方といひー々ケーベル氏を気取るの様子見えて極めて見悪し」(『万朝報』 ①)等、批判的

な目で彼の演奏を批評している。瀧とケーベルの関わりを示す資料としては、瀧の遺品の1つにケーベルの写真が残されているのみである。また、ケーベルが音楽学校で瀧を教授したことを示す公的な資料もない。一方で、収集した新聞・雑誌記事は、ケーベルが瀧の師であり、瀧の音楽形成に影響を与えたであろうことを伝えている。しかも、こうした情報は、新聞・雑誌記事からしか知りえない。新たな資料は、いずれも既存の資料とほぼ同様の内容であるものの、瀧とケーベルとの関わりを補強する資料となっている。

次に、上記以外で、演奏に関する、より具体的な情報を提供してくれるのが、『天地人』の記事 3 点である。

## 『天地人』② 「近時の音楽会 音楽学校卒業式演奏会」(N.P.)

明治 32 年 7 月に開催された音楽学校の卒業演奏会の批評である。研究科生であった瀧廉太郎が 2 台のピアノによる 8 手連弾を行ったことに触れた記事である。この記事により、連弾の組み合わせとして、瀧と前田が 1 台を、橘と神戸がもう 1 台を担当し演奏したこと、また、連弾の様子がこれまでとは異なり、上声部と下声部のバランスの観点で触れられていることが新たな情報として得られる。ただし、瀧廉太郎がどのパートを演奏したかは、はっきりとしない。

## 『天地人』③ 「秋季音楽演奏会」[音楽学校秋季演奏会](カサレス)

明治 32 年 11 月に開催された音楽学校の秋季演奏会では、従来、ベートーヴェンのピアノソナタ作品 10 を演奏したことが知られていた。しかし、作品 10 には 3 曲が含まれており、どの曲かは不明であった。記事には「F 大音譜ピアノのソナタ」 5 とあり、へ長調の作品 10 の第 2 番を演奏したことが判明した。

#### 『天地人』⑤ 「東京音楽学校秋季音楽演奏会概評」(トロンコア)

明治 33 年 12 月に開催された音楽学校の秋季演奏会で、瀧廉太郎はメンデルスゾーンの「無言歌」を演奏したことが、これまでわかっていた。しかし、メンデルスゾーンは、48 曲の無言歌を残しており、その中のどれか、具体的な曲名は明らかではなかった。この記事により、演奏したのは「狩猟」であることが判明した。

## (2) 留学関連記事

留学関係資料で注目されるのは、『読売新聞』 ⑫と "Ost=Asien" ①である。

#### 『読売新聞』① 「独逸の音楽界と幸田幸子女史」

瀧廉太郎自身が、ドイツ留学中の様子を読売新聞の記者に語った記事である。この記事により、新たな事実が2点確認される。1つはヴィラセノールが、タイヒミューラーの弟子であったということである。瀧はライプチヒ王立音楽院を受験する前にヴィラセノールという人物にピアノの教授を受けていたが、その詳細はわかっていなかった。しかし、この記事により、タイヒミューラーとの関わりが判明した。

2 点目は、音楽院の受験の様子が明確になったということである。これまで合格したという 事実だけがわかっており、受験科目や受験の様子は不明であった。記事では、音楽院受験のた

めタイヒミューラーから課題曲を予め提示を受けていたということ,また,受験時にはその1 曲だけを演奏したということ,さらに,合格すれば名前が呼ばれ,不合格であれば,名前が呼 ばれないこと等,受験の際の様子が詳細に語られている。

## "Ost=Asien" ① "Japaner in Deutschland. 在独逸日本人"

"Ost=Asien"は、『東亜』を意味し、ドイツにおける在留邦人のための情報誌である。

瀧廉太郎はドイツ留学に際して,目的地であるライプチヒの前に,ベルリンに 3 週間あまり滞在している。この間,書簡より,ノーレンドルフ通りに滞在したことがわかっている。しかし,"Ost=Asien" ①の記事から,ベルリンの地において,別の場所にも滞在していた可能性が出てきた。記事は「在独逸日本人」の住所録である。これによれば,瀧の住所は「ノイエ・ヴィンターフェルト通り 56a」となっている。このことについて,"Ost=Asien"研究を行っている泉健氏は,2つの可能性を指摘する 60。1つは,「当初引っ越すつもりで『Ost=Asien』の編集部(玉井喜作)にこの住所を連絡したが,付近に行ってみて気が変わり,一つ北のノルレンドルフ通りに決めた」というもの,いま 1 つは「わずか 3 週間足らずの滞在にもかかわらず,1 度下宿をかえた」というものである。

瀧がノーレンドルフ通りに滞在したことは、学友の杉浦チカに宛てた 5 月 20 日付と、従兄の妻、瀧民子に宛てた 5 月 22 日付の絵葉書に記された住所で確認される。しかし、ベルリンの居住先に関するこれ以外の手掛かりとなる資料は、今のところ"Ost=Asien"①しかなく、「ノイエ・ヴィンターフェルト通り 56a」にも滞在したのかどうかは不明である。

## Ⅳ おわりに

本稿では、瀧廉太郎に関する新聞・雑誌記事を総目録として報告した。それにあたり、明治 20 年代から 30 年代に発行されていた新聞・雑誌の主要なものについて、網羅的に調査を行った。その調査は、今回の報告でほぼ完了した。本稿のⅢに収録した新たに見出された資料からの情報の多くは、新聞・雑誌記事からしか得ることのできない情報である。今後の研究に活用することで、瀧研究を少しでも進展させていきたい。

## 注および引用文献

- 1) 東京芸術大学所蔵。「留学生上申按」,「留学出発延期ノ件」,「申報書」,「帰朝命令書」等の書類 が収められている。
- 2) 本稿のⅢの目録を作成するにあたって調査した新聞・雑誌の所蔵先は、以下のとおりである。 「新聞〕

神奈川県立図書館 『毎日新聞』

国立国会図書館 『読売新聞』,『国民新聞』,『中央新聞』,『万朝報』

#### 〔雑誌〕

国立国会図書館 『天地人』

東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター "Ost=Asien"

- 3) 本稿の目録作成にあたり、既存のものは、『瀧廉太郎資料集』と『瀧廉太郎評伝』を参照した。
- 4) 中等唱歌集出版の企画・編集に関する経緯の詳細は、拙著「東京音楽学校編『中学唱歌』に関する研究」(『大分大学教育学部研究紀要』第38巻第1号,2016) を参照のこと。
- 5)「音譜」は、楽譜を意味することから、「F 大音譜」は、「へ長調の大譜表」の意であると考えられる。
- 6)「藤代禎輔(素人)の生涯 -瀧廉太郎,玉井喜作との接点を中心に-」,『和歌山大学教育学部 紀要 人文科学』,60集,2010

# General Catalogue of Articles about Rentarô Taki that were Published in Newspapers and Magazines during the Meiji Period

MATSUMOTO, Tadashi

#### Abstract

A purpose of this study is to make a general catalogue about Rentarô Taki from newspaper and magazine articles published in the Meiji Era. From these newspapers and magazines which were published during the Meiji period, we can obtain much information about his musical performance and his studying abroad.

[Key Words] Rentarô Taki, Concert in the Meiji Era, Japanese student studying music abroad in the Meiji Era